

るかるた机をかこみながら、まだためらいがちなわたくしを早く早くとせきたてるのです。

ですからわたくしも仕方がなく、しばらくの間は友人たちを相手に、いやいやかるたをしていました。が、どういうものか、その夜にかぎって、ふだんはかくべつかるたじょうずでもないわたくしが、うそのようにほとんど勝つのです。するとまたみようなもので、はじめは気のりもしなかったのが、だんだんおもしろくなりはじめ、もの十分とたたないうちに、いつかわたくしはいっさいを忘れて、熱心にかかるたをひきはじめました。

友人たちは、もとよりわたくしから、あの金貨をのこらずまきあげるつもりで、わざわざかるたをはじめたのですから、こうなるとみなあせりにあせって、ほとんど血相さえ変わるかと思うほど、むちゅうになって勝負をあらそいました。が、いくら友人たちが、やっきとなっても、わたくしは一度も負けないばかりか、とうとうしまいには、あの金貨とほぼ同じほどの金高だけ、わたくしの方が勝ってしまったじゃありませんか。

するとさっきの、人の悪い友人が、まるで、気がいのようないきおいで、わたくしの前に、札をつきつけながら、

「さあ、ひきたまえ。ぼくはぼくの財産をすっかりかける。地面も、家作も、馬も、自動車も、一つのこらずかけてしまう。そのかわり君はあの金貨のほかに、今まで君が勝った金をことごとくかけるのだ。さあ、ひきたまえ。」

わたくしはこのせつなに欲ができました。テエブルの上につんである、山のような金貨ばかりか、せつかくわたくしが勝った金さえ、今度運悪く負けたが最後、みな相手の友人にとられてしまわなければなりません。のみならずこの勝負に勝ちさえすれば、わたくしはむこうの全財産を一度に手に入れることができるのです。こんな時に使わなければ、どこに魔術などをおそわった、苦心のかがあるのでしょうか。そうおもつとわたくしは矢もたてもたまらなくなって、そつと魔術を使いながら、決闘でもするようないきおいで、

「よろしい。まず君からひきたまえ。」

「九。」

「王様。」

わたくしは勝ちほこった声をあげながら、まっさおになった相手の目の前へ、ひきあてた札をだしてみせました。するとふしぎにもそのかるたの王様が、まるでたましいがいったように、かんむりをかぶった頭をもたげて、ひよいと札の外へ体をだすと、ぎょうぎよく剣をもったまま、にやりと気味の悪い微笑をうかべて、

「御婆サン。御婆サン。御客様ハ御帰リニナルソウダカラ、寢床ノ仕度ハシナクテモ好イヨ。」

と、ききおぼえのある声でいうのです。と思つとどういうわけか、まどの外にふる雨脚までが、きゆうにまたあの大森の竹やぶにしぶくような、さびしいざんざぶりの音をたてはじめました。